

短大幼児教育学科学生の性格特性について(3)

林 悠 子

A Study on Characteristics of Students in the Department of Early Childhood Education (3)

Yuko Hayashi

1. はじめに

本研究では、本学紀要第39号(2008)¹⁾の続報として、幼児教育学科学生の性格特性を明らかにすることを目的とする。

前報において、N女子短大幼児教育学科学生を対象に東大式エゴグラム(TEG)を用いて調査を行い、次のことが明らかとなった。N女子短大生においては、(1)全般に「母親的な役割を担う養育的な親」や「子ども」の自我状態が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」や「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」の自我状態が少ない。(2)1回生と2回生の性格特性には顕著な差がないが、1回生と3回生では「自由な子ども」で差がある傾向が見られた。(3)依存的な「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が最も多い。次いで、そこに「父親的な役割を担う批判的な親」の部分を含ませ持った学生、「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」を持った学生が多い。

本研究では、現在の1回生と2回生を調査対象とした。それぞれの性格特性を明らかにするとともに2回生の昨年度の個人プロフィールデータを比較することで経年変化を見ることを目的とした。

2. 方法

(1) 対象

N女子短期大学幼児教育学科学生を対象とした。被験者の内訳は以下の通りである。

幼児教育学科第一部1回生(2クラス):32名(18.4±0.62歳)

A:18名(18.4±0.70歳)

B:14名(18.4±0.71歳)

幼児教育学科第三部2回生(2クラス):25名(19.8±1.40歳)

C:14名(19.3±0.47歳)

D:11名(20.5±1.86歳)

(2) 調査方法

調査用紙には東大式エゴグラム(TEG)を用いた。学生には調査主旨を説明し了解を得た上で、

授業時間の一部を利用して全員一斉に行った。回答時間は15-20分であった。

(3) 調査用紙と分析方法

T E Gは、60項目からなる質問紙で、各項目に対し“はい (○)”、“いいえ (×)”、“どちらでもない (△)”の3件法で回答するものである。質問項目は10項目ずつ、自我状態を表す5つの尺度を構成している。5つの尺度とは親 (Parent) ; 「父親的な役割を担う批判的な親 (Critical Parent : 以下C Pとする)」、 「母親的な役割を担う養育的な親 (Nurturing Parent : 以下N Pとする)」、大人 (Adult : 以下Aとする)、子ども (Child) ; 「もって生まれた自然な姿である自由な子ども (Free Child : 以下F Cとする)」、 「親の影響を受けた順応した子ども (Adapted Child : 以下A Cとする)」である。残りの10項目は質問に対する妥当性尺度を構成し、T E Gに対する回答態度の信頼性の判定に用いられる。

回答は“はい (○)” : 2点、“いいえ (×)” : 0点、“どちらでもない (△)” : 1点として得点化され、尺度ごとに合計点を算出し、分析を行った。

また、T E Gは“どちらでもない”で回答した項目によって構成される疑問尺度 (Q尺度) を備えており、合計点が35点以上の場合は防衛的な態度や決断力の乏しい優柔不断さが顕著になり、判定する上で信頼性が乏しくなるとされている。本研究においても、Q尺度で35点以上を示した被験者については分析対象から外すものとする。

統計処理にはすべて解析ソフトS P S S 11.0 J. for Windows を用いて分析を行った。

(4) 調査実施日

2009年7月10日 (Bクラス)、31日 (Aクラス)、9月3日 (2回生)。

3. 結果

得られた57名の回答のうち、Q尺度が35点以上であった被験者2名 (1回生Aクラス1名、2回生Cクラス1名) については分析から除外した。そのため、最終的な分析対象は1回生A : 17名・B : 14名、2回生C : 13名・D : 11名の計55名であった。

また、比較対象として現2回生の1年次のデータを用いた。

(1) 各クラスの結果

各クラスのエゴグラム の平均値と標準偏差を示す (表1)。いずれのクラスにおいてもN P尺度得点が最も高く、C P尺度得点が最も低いこと、次いでA尺度得点が低いことが伺われる。この結果は前報と同じ傾向であった。

表1. 各クラスのエゴグラムの平均得点とSD

| | CP | | NP | | A | | FC | | AC | |
|---|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD |
| A | 7.5 | 4.52 | 15.1 | 2.99 | 9.5 | 3.47 | 14.1 | 4.63 | 10.6 | 4.94 |
| B | 9.6 | 4.22 | 13.8 | 2.04 | 10.1 | 3.48 | 13.8 | 3.51 | 14.1 | 3.17 |
| C | 9.6 | 3.43 | 16.1 | 2.10 | 11.0 | 4.73 | 13.8 | 3.03 | 12.8 | 4.81 |
| D | 7.8 | 3.40 | 14.6 | 3.96 | 10.7 | 5.14 | 12.6 | 5.08 | 12.5 | 5.18 |

(2) 学年による比較

1 回生（2 クラス；31名）と 2 回生（2 クラス；24名）のエゴグラムの平均値と標準偏差を示す（表 2、図 1）。平均値ではFC尺度以外のすべての尺度において 2 回生の得点が 1 回生の得点を上回っていたが、有意な差は認められなかった。

表2. 各学年のエゴグラムの平均得点とSD（1 回生；N=31, 2 回生；N=24）

| | CP | | NP | | A | | FC | | AC | |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD | Mean | SD |
| 1回生 | 8.4 | 4.44 | 14.5 | 2.64 | 9.8 | 3.43 | 13.9 | 4.10 | 12.2 | 4.52 |
| 2回生 | 8.8 | 3.46 | 15.4 | 3.11 | 10.9 | 4.81 | 13.3 | 4.05 | 12.7 | 4.88 |

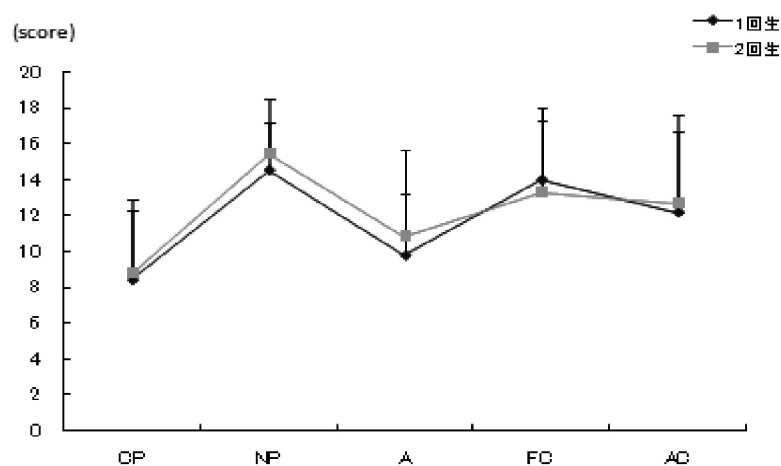


図1. 各学年のエゴグラムの平均得点とSD（1 回生；N=31, 2 回生；N=24）

(3) 2 回生における 1 回生時との比較

2 回生の今回の調査によるエゴグラムの平均値と標準偏差、および昨年（1 回生時）の調査によるエゴグラムの平均値と標準偏差を示す（表 3、図 2）。すべての尺度において昨年よりも今年の得点が高かったが、尺度間に有意な差は認められなかった。

表 3. 2 回生の今年と昨年のエゴグラム の平均得点と S D (今年 ; N=24, 昨年 ; N=25)

| | C P | | N P | | A | | F C | | A C | |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | Mean | S D | Mean | S D | Mean | S D | Mean | S D | Mean | S D |
| 今年 | 8.8 | 3.46 | 15.4 | 3.11 | 10.9 | 4.81 | 13.3 | 4.05 | 12.7 | 4.88 |
| 昨年 | 8.2 | 3.76 | 14.8 | 2.78 | 10.3 | 4.13 | 13.0 | 3.17 | 12.6 | 3.56 |

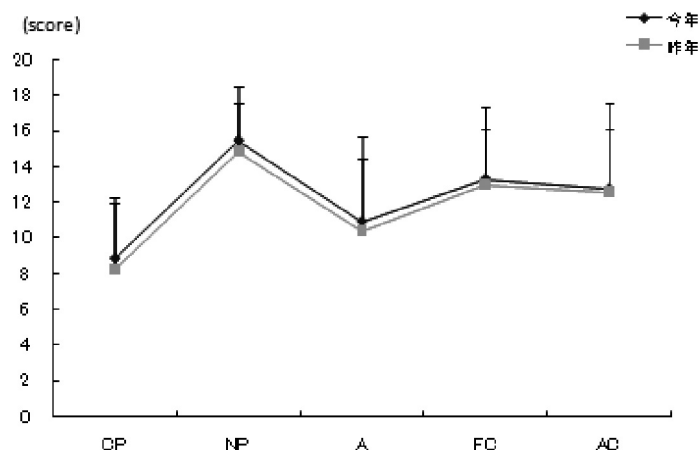


図 2. 2 回生の今年と昨年のエゴグラム の平均得点と S D (今年 ; N=24, 昨年 ; N=25)

(4) 個人プロフィール型の分類

各個人の尺度得点から、標準化されたエゴグラムプロフィールを作成し、得られたプロフィールを19パターン(さらにパターンを細分化した29種類)に分類し、どのパターンが多いのかを調べた。

最も多いものから、A C 尺度だけが高い「A C 優位型」15名(27.3%)、F C 尺度だけが高い「F C 優位型」が7名(12.7%)、C P と A C ・ F C の3尺度が同程度に高く他が相対的に低い「U-Ⅱ型」5名(9.1%)、A 尺度だけが高い「A 優位型」と N P 尺度と A C 尺度が高い「N-Ⅰ型」が4名(7.3%)と、定められた19パターンのうち、15パターン18種類に分類された。全パターンの人数と割合は表4、図3に示す。

各尺度の平均得点ではなく、各個人の自我状態における標準化されたパターンからは、A C 尺度すなわち「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生がほぼ1/4を占め、次いで「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態、さらに「子ども」と「父親的な役割を担う批判的な親」の部分をあわせ持った学生が多いことが示された。

表 4. 分類された個人エゴグラムプロフィール型の人数と出現頻度 (%), (1 回生; N=31, 2 回生; N=24)

| | AC優位型 | FC優位型 | UII型 | A優位型 | NI型 | NP優位型 | CP優位型 | A低位型 | AC低位型 | 逆NI型 | M型 | 平坦II型 |
|-----|-------|-------|------|------|-----|-------|-------|------|-------|------|-----|-------|
| 1回生 | 7 | 6 | 5 | 2 | 2 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| (%) | 22.6 | 19.4 | 16.1 | 6.5 | 6.5 | 6.5 | 6.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 6.5 |
| 2回生 | 8 | 1 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 0 |
| (%) | 33.3 | 4.2 | 0.0 | 8.3 | 8.3 | 0.0 | 0.0 | 8.3 | 8.3 | 8.3 | 8.3 | 0.0 |

| | CP優位型 | NP低位型 | FC低位型 | UI型 | NI型 | 平坦I型 |
|-----|-------|-------|-------|-----|-----|------|
| 1回生 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| (%) | 3.2 | 0.0 | 0.0 | 3.2 | 3.2 | 0.0 |
| 2回生 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| (%) | 0.0 | 4.2 | 4.2 | 0.0 | 0.0 | 4.2 |

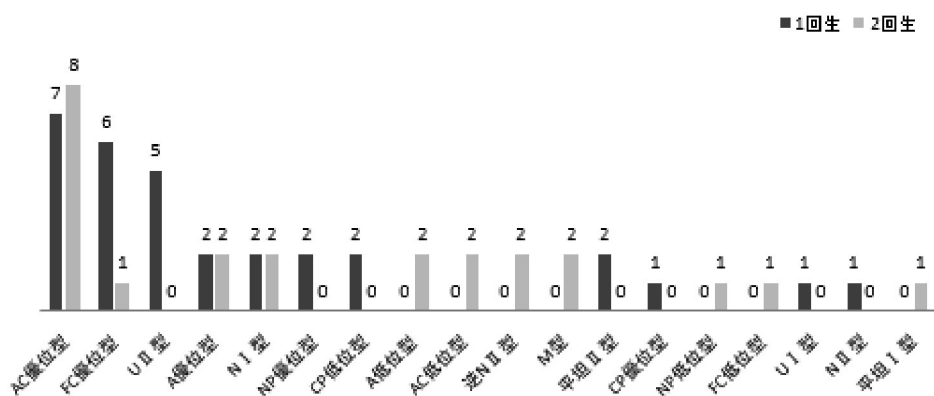


図 3. 分類された個人エゴグラムプロフィール型の人数と出現頻度 (%), (1 回生; N=31, 2 回生; N=25)

(5) 2 回生の個人プロフィール型の変化

2 回生について、昨年の個人プロフィール型と比較してどのパターンが多いのかを調べた。今年の分類では、AC 尺度だけが高い「AC 優位型」8 名 (33.3%) と最も多く、次いで A 尺度だけが高い「A 優位型」や CP 尺度と FC 尺度が高い「逆 N-II 型」など 6 パターンが 2 名 (8.3%) と、11 パターン 11 種類に分類された。昨年は、AC 尺度だけが高い「AC 優位型」5 名 (20.0%) が最も多く、次いで FC 尺度だけが高い「FC 優位型」と、5 尺度がほぼ平坦で中位にある「平坦 II 型」が 3 名 (12.0%) というように、12 パターン 13 種類に分類された。全パターンの人数と割合は表 5、図 4 に示す。

今年も昨年とも、各個人の自我状態における標準化されたパターンからは、AC 尺度すなわち「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が最も多かった。今年は昨年には見られなかった「客観的かつ論理的なものごとを理解できる大人」の部分を持つ学生が見られた。

表 5. 2 回生の分類された個人エゴグラムプロフィール型の人数と出現頻度 (%), (今年; N=24, 昨年; N=25)

| | AC優位型 | A優位型 | NI 型 | A低位型 | AC低位型 | 逆NI 型 | M型 | FC優位型 | NP低位型 | CP低位型 | 平坦 I 型 |
|-----|-------|------|------|------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|--------|
| 今年 | 8 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| (%) | 33.3 | 8.3 | 8.3 | 8.3 | 8.3 | 8.3 | 8.3 | 4.2 | 4.2 | 4.2 | 4.2 |
| 昨年 | 5 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| (%) | 20.0 | 0.0 | 4.0 | 8.0 | 4.0 | 0.0 | 0.0 | 12.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |

| | UI 型 | NP優位型 | CP優位型 | 平坦 II 型 | CP優位型 | UI 型 | 逆NI 型 | 台形 III 型 |
|-----|------|-------|-------|---------|-------|------|-------|----------|
| 今年 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| (%) | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 昨年 | 1 | 2 | 2 | 3 | 1 | 1 | 2 | 1 |
| (%) | 4.0 | 8.0 | 8.0 | 12.0 | 4.0 | 4.0 | 8.0 | 4.0 |

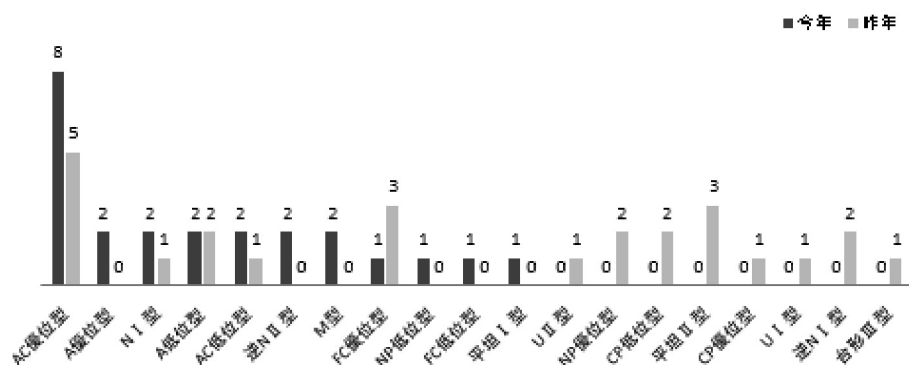


図 4. 2 回生の分類された個人エゴグラムプロフィール型の人数と出現頻度 (%), (今年; N=24, 昨年; N=25)

4. 考察

(1) エゴグラムの平均値からみる今年度の学生像について

学生らがそれぞれどのような自我状態を有しているのかを調べたところ、「母親的な役割を担う養育的な親」が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」と「客観的かつ論理的なものごとを理解できる大人」の部分が少ないことが示された。この結果は、エゴグラムにより保育学生の特性を分析した中村ら (1997²⁾, 1999³⁾) や、その性差を検討した永房ら (2006)⁴⁾ の先行研究と一致するものであり、また前報¹⁾、前々報⁵⁾での報告と一致するものであった。幼児教育を志す学生として、「母親的な役割を担う養育的な親」すなわち「思いやりを持って世話をするやさしい母親のような親の心」を持っていることは喜ばしいといえよう。責任感の強さや厳格さをそなえた「父親的な役割を担う批判的な親」の部分や、「客観的かつ論理的なものごとを理解できる大人」の部分の低さは、この時期の一般的な学生像とも一致しているが、この部分をいかに育てていくかが重要である。

1 回生と 2 回生の性格特性について、学年での比較を試みたが、「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の平均得点以外、2 回生の得点が 1 回生を上回っていたものの顕著な差は認められなかつ

た。また、2回生において1回生時のデータと比較をすることにより経年変化を見ることを試みたが、すべての尺度で今年の平均得点の方が高かったものの、顕著な差は認められなかった。これも前報¹⁾に一致するものであった。先行研究によれば、看護学生の1・2年次と3年次で学年間に差が現れ、「自由な子ども」の減少、「親」や「大人」の増加などが認められている（武藤ら；1995）⁶⁾。また、入学時と卒業時のエゴグラムの変化を見た松田ら（2009）⁷⁾の報告では、入学時の得点は高校卒業直後の状態を反映しており卒業時の得点は4年間の大学生活による自我状態の変化によるものとしている。短大生活3ヶ月と1年3ヶ月というこの期間では、個人の変化はあるものの影響を及ぼし得る集団的な変化に行き着いていないと考えられる。

（2）個人プロフィールパターンから見る今年度の学生像について

各個人の尺度得点から、標準化されたエゴグラムプロフィールを作成し、どのパターンが多いのかを調べた。その結果、「AC優位型」が最も多く、FC尺度だけが高い「FC優位型」、CPとAC・FCの3尺度が同程度に高く他が相対的に低い「U-II型」、A尺度だけが高い「A優位型」とNP尺度とAC尺度が高い「N-I型」などがみられた。全体に、AC尺度すなわち「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が多く、このことは先行研究¹⁾⁵⁾⁸⁾に一致するもので、今年度の学生も大学生の一般的な性格特性を有していると考えられる。「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態を持った学生も多いが、1回生も2回生も「AC優位型」の人数はあまり変わらないものの、「FC優位型」や「U-II型」はほぼ1回生でのみ見られるパターンであり、1回生で特に「子ども」の部分が強いのといえる。「自由な子ども」は明るく行動的であり、自分の感情を素直に表現する、のびのび振舞うなどの良い面がある一方で、過ぎると自分勝手に行動のコントロールができず、周囲に対する配慮に欠けるなどの面が指摘される。「順応した子ども」は協調性があるて周りに適応しやすく、忍耐強く、他者に対して寛大であるといった面がある一方で、従順で依存心が強く、主体性に欠け、自己否定しがちであるといったマイナスの面が強調されることも多い。幼児教育の中では子どもと関わることは多く、「子ども」の部分を持っていることは必要であるが、バランスを保ちながら「大人」の部分も兼ね備えねばならないであろう。

2回生について、今年はAC尺度だけが高い「AC優位型」が最も多く、次いでA尺度だけが高い「A優位型」やCP尺度とFC尺度が高い「逆N-II型」などが見られた。昨年は、AC尺度だけが高い「AC優位型」が最も多く、次いでFC尺度だけが高い「FC優位型」と、5尺度がほぼ平坦で中位にある「平坦II型」が見られた。いずれも「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が最も多かったが、今年は昨年には見られなかった「客観的かつ論理的なものごとを理解できる大人」の部分も多く持つ学生が見られた。1年次には「子ども」の部分が多かったものの、2回生になり様々な経験をする中で自我状態の変化があったのであろう。調査を行ったのが9月であり、ほとんどの学生が保育所実習、施設実習を経験し、また調査日の翌週からは3週間の幼稚園実習を控えていた。先行研究では実習体験によりA尺度得点の有意な得点の増加が認められたことが報告されており⁶⁾、本学学生にとっても実習を経験したことが自我状態の変化につながったのではないかと考えられる。1回生においても、このような変化がまた見られるのか興味深いところである。

5. まとめ

本研究は、本学紀要第39号（2008）の続報として、幼児教育学科学生の性格特性を明らかにすることを目的として行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

- （1）N女子短大生においては、「母親的な役割を担う養育的な親」の自我状態が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」と「客観的かつ論理的なものごとを理解できる大人」の自我状態が少ないことが示された。
- （2）1回生と2回生の性格特性には顕著な差はなく、また1回生時と比較して2回生の性格特性に顕著な差は現れなかった。
- （3）昨年度と同じく、「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が最も多かった。次いで「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態を持った学生も多いが、特に1回生で「子ども」の部分が強いといえる。2回生では昨年度は見られなかった「客観的かつ論理的なものごとを理解できる大人」の部分を多く持つ学生が見られた。

〔引用文献〕

- 1) 林悠子（2008） 短大幼児教育学科学生の性格特性について（2） 奈良文化女子短期大学紀要, 39, 91-100
- 2) 中村陽一・渡邊ユカリ（1997） エゴグラムからみた保育者養成短期大学生の傾向 日本保育学会大会発表論文抄録, 50, 204-205
- 3) 中村陽一・渡邊ユカリ（1999） 保育者養成におけるエゴグラム分析の効果（2） 日本保育学会大会発表論文抄録, 53, 398-399
- 4) 永房典之・伊澤永修・星道子（2006） 保育学生のエゴグラムにおける性差の検討 東京文化短期大学紀要, 23, 1-4
- 5) 林悠子（2007） 幼児教育学科学生の性格特性について 奈良文化女子短期大学紀要, 38, 151-160
- 6) 武藤眞佐子（1995） エゴグラムからみた看護学生の特徴 岩手女子看護短期大学紀要, 3, 17-32.
- 7) 松田勇・小林隆司・香田康年・難波悦子・岩田美幸（2009） 理学・作業療法科学生の入学・卒業時の自己像の変化と理想とする専門職像について 吉備国際大学保健科学部紀要, 19,73-78
- 8) 松田勇・小林隆司・難波悦子・山口隆司・丸田和夫（2007） 医療・介護とその関連職における職業同一性について－エゴグラム・OKグラムを用いて－ 吉備国際大学保健科学部紀要, 12,83-89

〔参考文献〕

- （1）東京大学医学部心療内科TEG研究会編（2006）新版TEGⅡ 解説とエゴグラムパターン. 金子書房
- （2）東京大学医学部心療内科TEG研究会編（2002）新版TEG活用事例集. 金子書房